

## 献辞

「上杉さん、民俗学を勉強している田中です。これからいっしょに成城で教えることになりましたが、まあ、ひとつ、よろしくお願いします。ところでね、上杉さん、最近、こういうものを書いてみましたよ。外国のことをやっている上杉さんにはあまり興味がないかも知れんですが、まあ、ひとつ、暇なときにも読んで、感想でも聞かせてください。」

今からちょうど一〇年ほど前の平成一二年（二〇〇〇年）、私が某国立研究機関から成城大学に赴任してしばらくした頃、たしかこういうようなきわめて控えめな言葉とともに田中宣一先生からいただいたのが、ずしりと重い『徳山村民俗誌―ダム水没地域社会の解体と再生』（慶友社、二〇〇〇年）であった。

その『徳山村民俗誌』を、いま、改めて手にしている。飾り気のない、どちらかと言えば地味な装丁の本である。が、装丁の地味さとは裏腹に、書かれている内容はかなり「革新的」である。通常の民俗誌とは異なり、この本の力点は伝統的な習俗や慣行、儀礼等を書き留めることに置かれてはいない。日本最大級の徳山ダムの建設をめぐる揺れ動く徳山村民の心情、そしてダム建設の決定・開始に伴う村の解体と村民の移転などが、時として冷徹なほどに、淡々と記されている。ホットな問題を避ける傾向

にある民俗学が、当時もつとも注目されていた問題の一つ、徳山ダム建設をめぐる民俗の問題に取り組むことは当時としては「革新的」であつたと思う。が、それ以上に「革新的」に思えるのは、ダム建設をめぐる村民の利害・葛藤・軋轢、そして村の解体や集団移転という厳しい現実を見据えながらも、元村民たちによる相互扶助や連帯の再生・復活という明るい兆しをも見逃さないという、人々の視点に立つた田中先生の研究者としての立ち位置であろう。同僚教員として傍らから田中先生のお仕事を拝見し、あるいは日々の教育研究活動に親しく接するほどに、「田中民俗学」には首尾一貫して人々への「慈愛」があるように思われる。

さて、前置きがいささか長くなってしまったが、二〇〇九年度の『日本常民文化専攻紀要』第二八輯は、田中宣一先生とともに成城大学文芸学部文化史学科並びに大学院文学研究科日本常民文化専攻で教育研究に取り組んできた私ども同僚教員と、田中先生の薫陶を受け、今まさにプロの研究者の道を歩み始めた教え子の一人が、田中先生の退任を記念して刊行する「田中宣一先生退任記念」号である。

大学院文学研究科日本常民文化専攻主任として本記念号のまとめ役を仰せつかったものの、田中先生が成城大学で過ごした年月の三分の一にも満たない期間しか在籍しておらず、しかも、隣接分野とは言え文化人類学（民族学）を専門としていることもあり、田中先生がこれまでに行ってきた広範な民俗学の調査研究等について、私がこの「献辞」の中で過不足なく紹介することなどできるものではない。そこで、数年間身近に接してきたごく私的な観点から田中先生を紹介することで、私の献辞に代えさせて

いただきたい。

田中宣一先生は昭和三七年（一九六二年）に國學院大学を卒業され、さらに同大学大学院に進学して民俗学の研鑽を積まれるとともに、神奈川県立茅ヶ崎高校教師として教員生活の一步を踏み出された。それから成城大学に赴任されるまでの一四年間を、高校教員として過ごされたという。当時の教え子の一人は、私もよく知っている新進気鋭の女性文化人類学者（国立民族学博物館准教授の宇田川妙子さん）だということを何かの折に聞き、世の中は案外狭いなと思つたものである。

田中先生は高校で教鞭を取る傍ら、コツコツと民俗学の調査研究を進められた。その成果が認められ、昭和五一年（一九七六年）、民俗学のメツカの一つであるわが成城大学に民俗学担当教員として招かれた。以来、本二〇一〇年に退職を迎えるまで、三四年の長きにわたつて文芸学部文化史学科並びに大学院文学研究科日本常民文化専攻において教育・研究に携わつてこられた。

成城大学では多忙な教育の合間を縫つて地道に調査研究を重ねられ、すでに冒頭で紹介した『徳山村民俗誌』のほか、『町内会』の民俗学的研究』（共著・一九八七年）、『雑木林と人々のくらし』（共同執筆・一九九〇年）、『食の昭和文化史』（共編・一九九五年）『海と島のくらし』（共編著・二〇〇二年）、『祭りを乞う神々』（二〇〇五年）、『供養のこころと願掛けのかたち』（二〇〇六年）、『半島のくらし—広域民俗誌の試み』（二〇一〇年）などの研究成果を次々と刊行されていった。また、そうしたご自身の調査研究活動と平行して、昭和五七年（一九八二年）以来、川崎市の民俗文化財緊急調査団長などと

して川崎や伊勢原、多摩市などの自宅周辺の民俗調査も主導されてこられた。

教育においては、田中先生は「慈愛」をもって辛抱強く学生たちと接してこられたようにお見受けする。そのせいか、私のような狭量な教師には到底面倒を見切れないような個性の強い「ファン」が多数、田中ゼミ・田中研究室に集まっていたように思う。練習試合で複雑骨折をして授業を休むようなテコンドーの元学生チャンピオンや女子プロレスのマニアを自認するものなど、通常の大学院教育や民俗学の枠には収まり切らないような大学院生たちとともに先生は新しい民俗学を開拓し、いつの間にやら立派な修士論文や博士論文を書かした、さらには研究書まで刊行せしめる。田中先生の教師としての守備範囲の広さと力量には並々ならぬものがある。田中先生がご存知かどうかは定かではないが、(大学)学部生はもとより、大学院生や卒業生・修了生までもが田中先生のことをしばしば「宣ちゃん」と呼んでいる。最初に耳にしたとき、教師をないがしろにするとは何事かと私は大いに憤慨したものである。が、このニックネームは決して田中先生を軽んじるものではなく、尊敬と親しみを込めたものであることを知るのに大して時間はかからなかった。

私にとつて、田中先生を語る上でのキーワードの一つは間違いない「慈愛」である。が、もう一つキーワードを加えるとすれば、それはたぶん「正論」ということになるであろうか。田中先生は時として頑ななまでに本来のあり方、正しい道を説かれる。今日風に言えば、それは時としてKY（空気が読めない）ということにもなる。それがために教授会が異様に緊張したことも一度や二度ではなかった

と記憶している。が、しかし、私は田中先生の唱える正論にいたく感服することもしばしばであった。そういう意味で、田中先生は、わが文化史学科・日本常民文化専攻のみならず文芸学部・大学院文学研究科、さらには成城大学全体の「ご意見番」でもあった。

田中先生の研究に関して、ぜひとも申し添えておかねばならないことが一つある。周知の通り、成城大学は日本の民俗学の教育研究の中心の一つである。分けても、田中先生が長年にわたって教育研究を主導して下さってきた文芸学部文化史学科・大学院文学研究科日本常民文化専攻と民俗学研究科がその拠点となっている。私も関係教員は一丸となって拠点の強化を図ってきた。その一環として一昨年（二〇〇八年）一〇月、文部科学省の財政的な支援（私立大学戦略的研究基盤形成支援事業）を獲得し、民俗学研究科の下にグローバル研究センターを新設した。文部科学省の財政的支援申請を強力に後押しし、結果として、グローバル研究センターの新設を可能と下さったのは、当時、大学院文学研究科長を務められていた田中先生であった。その後も、今日に至るまで、首尾一貫して私も後進教員の新たな教育研究活動の試みを支援して下さっている。

田中先生は大学運営においても数多くの重責を全うされた。文芸学部文化史学科や大学院日本常民文化専攻主任をはじめ、民俗学研究科所長や大学入試広報部長、入試管理委員会委員長、大学評議会評議員、さらには大学院文学研究科長などを歴任された。また、学外では、日本民俗学会評議員や理事、文化庁文化財保護審議会専門員、国立歴史民俗博物館運営協議員、神奈川県や川崎市、世田谷区、多摩市、

伊勢原市の各種審議員や委員・専門員、さらには明治安田クオリティオブライフ文化財団伝統文化選考委員会委員などとして、長年にわたって学会運営や文化行政などに貢献されてきた。

田中宣一先生は、本二〇一〇年三月をもって成城大学を退職される。とは言え、心身ともにすこぶる壮健とお見受けする田中先生には、引き続き「慈愛」と「正論」のメッセンジャーとなつてわが成城大学にお越しいただきたいと思つている。「〓隠居さん」なればこそ、「〓意見番」の威力はいやが上にも増すというものである。

平成二十二年（二〇一〇）年一月

上杉富之